＜ちょこっとコラム⑭＞

（教会の暦　その⑤）

「棕櫚（しゅろ）の主日」　*Palm Sunday*

復活日（イースター）の一週間前の復活前主日は、別名「棕櫚の主日／日曜日」と呼ばれます。最後の晩餐とそれに続く受難の前にイエス・キリストがエルサレムに入城した時に群衆がなつめやし（しゅろ）の枝を持ち、また道に敷いて迎えた（ヨハネによる福音書 12:12～15）ことを記念する日です。この主日は 4 世紀から守られ、伝統的に棕櫚の葉を持って教会の近隣を行進します。近年では、棕櫚の葉で十字架を作り、翌年の大斎節まで身近に置いたり、家の戸口に付けることが慣習とされています。それを燃やしたものが大斎始日（灰の水曜日）に使われます。当日は、福音書の受難物語が読まれ、礼拝の中で劇をする教会もあります。